**きたるべきヤポネシア族の祭へ向けて　杉崎任克（SUGEE、音楽家）**

”この(久高)島こそが、この地上こそがニライカナイなのではないかと思えてくる”

大重潤一郎監督は遺作でもある「久高オデッセイ第三部風章」のエンディングでこう語りこの世を去った。

肝臓ガン末期の病床で意識も混濁し、まさにあの世とこの世の間にいた監督が、改めて久高島＝この世を見つめ返した時に発した”遺言”は今も僕の心を揺さぶる。

言語に絶する美しい久高島の自然と、神人（カミンチュ）と海人（ウミンチュ）が祈りを中心に据えてたくましく生きるその様は、まさにこの世が神の世界であるニライカナイの具現化なのではないかと感じざるを得ない。

久高島でのカミンチュの祈りは、古来から地下水脈のように海洋アジア全域と繋がっている。

久高島で監督と出会い島の人達に叱咤激励されながら少しずつ成長させて頂いた僕は、いつしかこの島で祈りと音の祭を開きたいと思うようになった。

ヤポネシア＝海洋アジアの祈りと音の祝祭である「ヤポネシア音楽祭」を通して、再びアジアが心から繋がることを強くイメージしたのである。

2002年に初めて十五夜祭で奉納演奏をさせて頂いて以来、もうすでに20年近くの付き合いになるシマンチュの皆様はこの祭の提案に「よしやろう！」という頼もしい言葉で応えてくれた。

久高の神様が声をあげて喜ぶような、ホンモノの祭を開きたい。

この聖地久高島でのヤポネシア音楽祭、是非ご協力とご参画を宜しくお願い致します！！！

**「ヤポネシア音楽祭」開催にあたって　比嘉真人（沖縄映像文化研究所代表・「久高オデッセイ第三部　風章」助監督、映像作家）**

私は久高島を舞台にした長編記録映画「久高オデッセイ」大重潤一郎監督の第三部・風章（2015年完成）の助監督をつとめました。この映画は12年に渡り久高島の島人の営み、そして日常と祭祀の中に連綿と地下水脈のように続けられてきた島の女性たちの祈りが記録されています。

久高島は琉球の神話において、アマミキヨという祖神がニライカナイ（海の彼方にあるとされる理想郷）から最初に降り立ち、国づくりを始めた地とされています。

かつて独立国家であった琉球王朝時代には、アジア諸国との海上交易で繁栄を築いた王府が国の安泰、繁栄そして航海の安全祈願のため、国王自ら最高位神女・聞得大君（チフィジン）を伴って久高島参詣するなど（後に斎場御嶽から遥拝する形となる）とても重要な場所として位置づけられ、神の島として崇められてきました。時代の荒波で王国が滅び、それに伴い国家祭祀を司る神女の継承式であるイザイホーも途絶えましたが、今も自然や祖先を崇拝した日々の祈りは生活に息づき、「日本人の魂の原郷」として訪れる人の心を魅了してやみません。

また、ここ久高島の素朴で雄大な自然に身を投じれば、心身はバランスと活力を回復し、再び人は自然と繋がり、あらゆる生命は自然に生かされているのだと思い出すきっかけを得ることができます。そういった自然の力を身近に感じることができるのも久高島の魅力の一つだろうと思います。

　この度、このような特別な聖地である久高島においてNPO法人久高島振興会の多大なるご支援ご協力のもと、来る2020年10月に「ヤポネシア音楽祭」と題した祈りと音の祝祭を開かせて頂く運びとなりました。今、再び世界の平和と繁栄を願う祈りが、歌となり舞いとなり、久高島からアジア、世界へと届きますように！皆さまのお力添え、何卒よろしくお願いいたします。

**「ヤポネシア音楽祭」を呼びかける　　　　鎌田東二**

　「久高オデッセイ」三部作の監督・故大重潤一郎（1946－2015年）はよく「ヤポネシア」という言葉を使って、海の民の暮らしと繋がりの広さと大きさと深さを語っていた。

　私は大重とは1998年1月に出会って、1998年8月8日の「8・8・8」の日に神戸のメリケンパークで「神戸からの祈り　満月祭コンサート」を共に行なった。そして続けて、二ヶ月後の平成10年10月10日の「10・10・10」の日に鎌倉の大仏・高徳院で「東京おひらきまつり」を行なった。阪神淡路大震災で亡くなった方々への鎮魂と、喪失と痛みを抱えつつ今を生きる人々の活性を月の巡りのように取り戻す祭りであった。この二つの祭りは、喜納昌吉さんの呼びかけに始まり、細野晴臣さんや岡野弘幹さんたち、大勢の音楽家や芸術家や社会活動家が関わってくれた。

　それから22年、大重さんもニライカナイ（常世）に渡り、世代が一巡した時、次を担う40代の音楽家であるSUGEEさんと大重さんの遺作「久高オデッセイ第三部　風章」の助監督の比嘉真人さんが中心となって「ヤポネシア音楽祭」を呼びかけ、2020年10月10日と11日に行なうことになった。ぜひ多くの心ある方々のご参集をお願い申し上げます。。

　私が「ヤポネシア」という言葉を初めて聞いたのは、島尾敏雄の著作『ヤポネシア序説』（創樹社、1977年）を通してで、1970年代の後半にその言葉を知り共感を抱いた。それは孤立した島国日本を大きく海洋アジアへと開いていく列島的な解放のビジョンで、大重はそれをさらに拡大して「久高オデッセイ第四部」に隣国台湾など海洋アジアはもちろん、遠くインドネシアのマジャパイトやマラッカ海峡を越えて中東などとの交易や交流のルートとネットワークの再構築を夢見ていた。

　私はその大重のビジョンの中に、21世紀にもっとも必要な自然の中のいのちの交歓」を希求する「生態智」の知恵を見た。喜納昌吉は「すべての武器を楽器に！」と呼びかけたが、私たちは今こそ「生きとし生けるものいずれか歌を詠まざりける」、生きているすべての存在が歌を歌い合っていることの惑星的な奇蹟を確認し、平和的な未来を志向し構築していこうではないか。みなさまの声と歌と力をお寄せください。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2019年7月23日　鎌田東二拝

PS：私は長らく「NPO法人久高島振興会」の一会員ですが、このたびSUGEEさんこと杉崎任克さんの「ヤポネシア音楽祭」の呼びかけに応えてくださり、振興会の協力がいただけることになりました。同振興会を始め、久高島の方々と一緒になってみなさんと共に音楽祭を実現できれば幸いです。